

シラバスを改訂し、 全教師に、 学習評価を3観点で行う 意識の浸透を図る

北海道札幌南陵高校

2019年度、授業と評価の改善に着手した北海道札幌南陵高校。教務内規やシラバスの改訂などを通じて、教師の評価観の転換を図ってきた。多面的な評価を行うための環境が整い、20年度からは各教科・科目で、生徒の学習意欲を引き出すための学習評価に挑戦している。

生徒のよい面を見取る
評価の枠組みを整える

札幌市郊外に位置する北海道札幌南陵高校は、1学年4学級の中規模校で、地域の生徒を幅広く受け入れている。そのため、入学者の学力幅は広く、卒業後の進路も

多様だ。

そうした同校に2019年度赴任した柴田健一校長は、新学習指導要領を見据えた授業改善の一層の推進に着手した。課題は、主体的・対話的で深い学びの実現や、観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実を図ることだった。

たと、柴田校長は振り返る。

「本校の生徒に必要なのは基礎学力の定着であり、その課題に対して、教師は知識・技能の育成を強化する指導を行っていました。そして、目標を達成できない生徒に対して、厳しく指導する場面が少なからずありました。しかし、そうした指導だけでは、生徒は学習に前向きにはなれません。そこで、生徒の基礎学力の定着状況を把握しつつ、学力を多面的に捉え、そのよい点を評価して生徒の学習意欲を高めるという意識を、先生方に浸透させたいと考えました」

柴田校長は、教師が評価観を転換できるように、学習評価の枠組みを整えた。まず、学校経営シラバスを策定し、学校教育目標を踏まえて、育成を目指す生徒像や学校経営方針を示し、評価規準となる目標を明確化した。続いて、定期考査の結果に偏った評定を変えるため、教務内規を改訂した。特に留意したのは、成績不振者に対する指導だ。従来は、仮評定を1に定める際の根拠が明確化されていなかった。

そこで、新しい内規では、学習評価は観点別に行うことを明記し、仮評定1の場合は、観点別評価に基づいた理由書を成績単票とともに、校長に提出することを義務づけた。

「評定がどのような評価に基づいて判定され、今後の指導にどのような見通しを持っているのかを、学校として説明できる体制を整え、形式的な運用にとどまっていた観点別評価を充実させたいと考えました」（柴田校長）

シラバスや授業アンケートを、
授業改善につながる形式に

観点別評価を充実させるため、シラバスも改訂した。シラバスの項目に観点別評価はあったが、そこで説明されている内容は、教科・科目によって異なっていた。そこで、観点ごとに評価対象と、それぞれの評価規準を示すこととした。

教師による学校評価アンケートや生徒への授業アンケートの項目、それらの実施方法も変え

学校概要
 設立 1980(昭和55)年
 形態 全日制/普通科/共学
 生徒数 1学年約130人
2021年度進路実績(現役のみ) 4年制大
 は、札幌学院大、北星学園大、北海学園大、
 北海道医療大、北海道情報大、北海道文教大、
 東海大などに延べ36人が合格。短大・専門学
 校進学67人。就職42人。



戸枝亮寛
 3学年主任
 とえだ・あきのり
 教職歴17年。同校に赴任し
 て10年目。数学科。



佐藤恭子
 さとう・きょうこ
 教職歴21年。同校に赴任し
 て10年目。音楽科。



柴田健一
 しばた・けんいち
 教職歴36年。同校に赴任し
 て3年目。

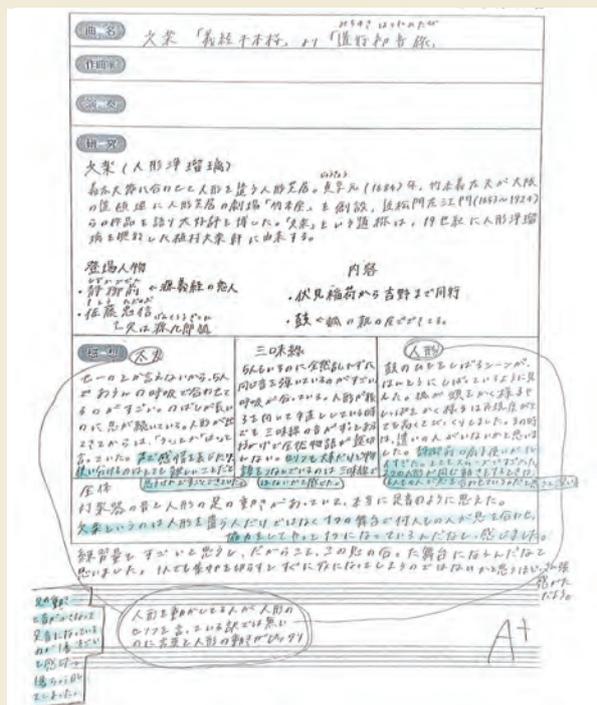
た。教師による学校評価アンケートは、年度末に加え、前期末に中間評価を実施し、自身の指導を振り返る機会を増やした。生徒への授業アンケートは、授業の参加度や理解度といった自己評価の項目に、「シラバスに基づいた授業だった」「教え合いや学び合いの機会があった」など、授業の進め方に関

する項目を加えて、教科ごとに回答する形式にし、各教科が授業の改善点を把握できるようにした。20年度の1学年からは、「基礎力診断テスト」(*1)の成績による表彰制度を導入。GTZ(*2)がBゾーン以上の生徒を優秀賞として、3段階以上アップした生徒を躍進賞として表彰した。

**レポートなどの成果物を
3観点で評価する音楽の授業**

「基礎力診断テスト」は、1・2学年は年3回、3学年は年2回実施していますが、以前の活用は、GTZを基にした学力下位層の把握と対策にとどまっていました。それを、学力上位層を表彰して評価するとともに、GTZ自体が低くても、成績を伸ばした生徒も表彰することで、教師が生徒の頑張りを認める多面的評価を意識できるようにしました(柴田校長)

図1 音楽科 3学年「文楽に親しもう」のレポート



マーカーが引かれた部分が、生徒が独自に感じ取れている点として、佐藤先生が評価した箇所。 ※学校資料をそのまま掲載。

別評価を試行してきた。評価で重視しているのは、生徒の言語表現だ。授業では、歌唱・演奏のスキルや表現力の向上と同様に、音楽の鑑賞力や言語表現力を含めた感性、知識、創造力、音楽を愛する心の育成に力を入れている。そのため、評価も、生徒が理解したことや感じたことを言語化した成果物を基に行っている。例えば、「鑑賞」では、生徒はオーケストラや歌曲、ミュージカル、文楽などの楽曲を聴き、佐藤先生から楽曲の特徴などの解説を受けた後、レポート(図1)を作成する。「鑑賞」だが、教師の解説以上に、独自に感じ取った点や、考えながら聴いていたことが分かる感想・気づきが書かれていれば、「主体的に学習に取り組む態度」の観点について加点する。加えて、批判的・分析的視点が盛り込まれていれば、「思考・判断・表現」の

*1 ベネッセのアセスメント「進路マップ」の1つで、義務教育範囲も含めた基礎学力を測るマーク式テスト。 *2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

図3 数学科 3学年「数学Ⅲ」シラバス(抜粋)

教科名	数学	科目名	数学Ⅲ	単位数	5
学科	普通科	学年	3	コース	総合 (理数) 必修 (選択)
使用教科書	数学Ⅲ Standard (出版社名) 東京書籍				
副教材等	9116 数学Ⅲ				

1 学習の目標

①学習に向かう力、人間性等について

- 課題に対して積極的かつ粘り強く取り組み姿勢を身につける。
- 教え合いの中で理解の深化を図る。
- 計画的かつ継続的な学習習慣を身につける。

②知識・技能について

- 数学的な用語や定義を理解する。
- 基本的な計算方法を習熟する。

③思考力・判断力・表現力等について

- 発展的な課題に対して、既知の知識との相違点を見つけ、関連づけることができる。
- 場合分けの必要性を理解し、適当な処理ができる。
- 抽象的な課題に対して、思考実験を行い、規則性を見いだすことができる。

2 学習の進め方

(1) 講義形式の授業を基本とします。
 (2) 毎週、課題を出します。週末を利用して家庭学習をすること。
 (3) 課題の中から小テストを行います。

3 評価の観点

	授業姿勢	提出物	小テスト	考査	割合
a: 主体的に学習に取り組む態度	10	10	10		30
b: 知識及び技能			10	40	50
c: 思考力・判断力・表現力等				20	20
割合	10	10	20	60	100

4 確保事項(必要な教材・道具、授業に臨む姿勢等)

(1) 教科書・ノート・ワークを毎時間用意すること。
 (2) ノートは他の科目と分けて使用すること。(ルーズリーフは可)
 (3) 鉛筆の他に色のペンを利用すること。(例: 赤と青)
 (4) 提出物は期日を守ること。

5 学習の計画(どのような内容をどの時期に学ぶか)

単元	単元目標	学習内容	単元評価
1	1-1 エンターテインメント、職業教育、観光	94 前期期末考査返却	a
2	2-1 確率論の確率、期待値、負の期待値	95 確率の方程式	a,b
3	3-1 複素数と極形式	96 極形式の方程式	a,b
4	4-1 原点を中心とする回転	97 平均値の定理	a,b
5	5-1 モーアールの定理	98 関数の増減、極大・極小	a,b
6	6-1 モーアールの定理の利用	99 関数の増減、極大・極小	a,b
7	7-1 複素数と多項式	100 関数の増減、極小	a,b
8	8-1 複素数と多項式	71 関数のグラフ	a,b
9	9-1 複素数と多項式	72 関数のグラフ	a,b
10	10-1 2次曲線(放物線)	73 第2次連関数と極値	a,b
11	11-1 2次曲線(楕円)	74 方程式と不等式への応用	a,b
12	12-1 2次曲線(楕円)	75 速度・加速度	b,c
13	13-1 2次曲線(双曲線)	76 近似値	b,c
14	14-1 2次曲線(双曲線)	77 不定積分(基本)	a,b
15	15-1 2次曲線の平行移動	78 積分	a,b
16	16-1 2次曲線と直線	79 部分積分	a,b
17	17-1 座分変換	80 分数関数の積分	a,b
18	18-1 サイクロイド	81 積分(基本)	a,b
19	19-1 極座標と極方程式	82 積分	a,b
20	20-1 極座標と極方程式	83 偶関数・奇関数の積分	a,b
21	21-1 分数関数	84 積分	a,b

数学科のシラバスでは、資質・能力の3つの柱を学習の目標として示し、観点別に評価対象の配点を記載。さらに、学習の計画には、各授業での学習内容と、その授業で評価する主な観点を示している。

※学校資料を抜粋して掲載。

む時間としている。1人で問題を解く生徒もいるが、生徒同士で教え合う中で、できなかった問題が解けるようになってきたり、他者に教えることで理解がさらに深まったりする体験を積み重ねるうちに、生徒はおのずと学習意欲を高めていくという。

「問題演習の間、私は教室中を回って、頑張っている生徒に声をかけたり、生徒のよい発言を拾って全体に広めたりしています。教師が生徒の言動を積極的に評価す

ることで学習意欲を高める様子が見られますが、私が見えていないところでも、生徒同士が学び合い、認め合う中で、自己肯定感を高めているのを感じます」(戸枝先生)

授業では、生徒の学習意欲を高める指導と評価の実践こそが重要だと、柴田校長は強調する。

「大切なのは、生徒が前向きに学習に取り組むようになることであり、観点別評価はそのための手段の1つだと考えています。生徒を多面的に見取れているか、思考

力や主体性などを伸ばすには、どのような工夫が必要なのか、常日自分の指導を問い続けることこそが、学習評価の充実に向けて重要な点ではないでしょうか」

基礎学力との相関を測り、評価観の転換を後押ししたい

今後、観点別評価の結果とGIZの相関を分析し、観点別評価の意義を明確にすることで、教師が前向きに授業改善に取り組む後押

しをした」と、柴田校長は言う。「どのような評価を受けた生徒が、GIZを上げているのか、その相関を明らかにすることが、既に観点別評価に取り組んでいる教師を勇気づけることにもなると考えています」

ICTを活用した授業実践と、評価の工夫も課題に挙げる。今後、生徒1人に1台ずつ配備されるタブレット端末を活用して、どのような授業を行うとよいのか、それが評価にどのような影響を及ぼすのか、22年度中に研修を積み重ねながら検討する予定だ。

「新学習指導要領の実施に向けて、一步一步、準備を進めてきました。多面的評価の必要性も浸透してきましたが、まだ全教師が同じ意識を持っていないわけではありません。生徒の学習意欲や自己肯定感を高めるための授業改善も、これからは本番です。今後は、教師同士が学習評価のあり方について議論をする機会を一層設けるなど、教師一人ひとりが自身の評価の妥当性を検討できる環境を整えたいと考えています」(柴田校長)